

「現代」の定着と「近代」

— 漱石の「今代」の使用を通して —

田島 優

はじめに

代助は近頃流行語の様に人が使ふ、現代的とか不安とか云ふ言葉、あまり口にした事がない。それは、自分が現代的であるのは、云はずと知れてゐると考へたのと、もう一つは、現代的であるがために、必ずしも、不安になる必要がないと、自分丈で信じて居たからである。

(夏目漱石『それから』六 明治四十二年)

二十世紀に生きている我々にとって、「近代」とは明治維新から終戦まで、「現代」とは終戦から現時点までと認識している。そのために、漱石の生きていた明治時代から大正時代前期、すなわち我々の感覚からいえば「近代」においても、その時代に「現代」が存在していたことをつい忘れがちである。「近代」と「現代」とが主として歴史的な意味で使用されているために、それぞれの語が確固たる時代区分を持っているような錯覚に陥るのである。漱石の時代においては、現代の我々が考えているような「近代」は終わっていないし、「現代」はまだ存在していないのである。終戦後を「現代」とするのは戦後の日本史学における定義にしか過ぎない。時間軸は絶えず伸びているの

「現代」の定着と「近代」

であるから、終戦後以降を指す「現代」も将来には適さなくなり、修正を余儀なくされるであらう。

『それから』によると、「現代的」という語が流行語になっていたことがわかる。『それから』の時代設定は、『それから』が連載される直前まで掲載されていた森田草平の『煤煙』がこの小説に取り上げられていたり、当時問題となっていた「白糖事件」への言及があることからほぼ同時代ということになる。明治四十年代頃に「現代的」が流行語になっていたことは、三宅雪嶺の「現代的、将来的、永久的」(『日本人』第五八一号 明治四十五年五月 後に『想痕』大正四年に収載)、次のように記されていることからわかる。

近頃一部の人が現代式といひ、現代的といふは、猶ほ嘗て当世といふの流行せしが如し。明治の初め、多少新時勢に適合すと考ふる者は、頻りに当世といふを振り廻はし、同趣味なるを称して文明開化とし、異趣味なるを罵りて固陋とし、因循姑息とし、当世の一語が靡然天下を風動せる形あり。今の現代式といふは斯く行はれず、斯く行はるべきも無く、孰れかと言へが一種の楽屋落ちに過ぎざれど、之を口にする者は自から時代の率先者なるかに心得つゝあり。

「現代的」あるいは「現代式」は、明治二十年代に新しく出現し三十年代には使用が多くなった「現代」に、これまた明治時代に接尾語

「現代」の定着と「近代」

として流行した「的」や「式」が結合したものである。三宅によれば、明治初期には「当世」という語が流行していたが、「現代」はその後を襲った語といえよう。三宅の書いた時（明治四十五年）においては「現代的」はまだ一部の人々にしか使用されておらず、三宅の考えでは一時的な流行で終わると思っていた。しかし三宅の予想に反し、「現代」という語が人々に必要であることから、形容詞や形容動詞的な役割を表す「現代的」も欠かせない語となったのである。ただし、漱石の作品には「現代的」という語は『それから』に7例^(注)使用されている他には『ころ』に1例用いられているだけである。『それから』においては先に見たように流行語的に使用しており、『ころ』(大正三年)においても同様な使い方である。

自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出す程に奥さんは現代的ではなかった。(116)

「現代的」の語基である「現代」は漱石の様々な作品に使用されている。ここでは「現代社会」「現代人」といった熟語をも構成している。初期や前期の作品では、例えば『吾輩は猫である』に2例、『草枕』に2例、『野分』では7例と多い。これは道也の演題が「現代の青年に告ぐ」となっていることによる。そして『三四郎』に3例、『それから』では「現代的」を除いて7例、『門』に1例ある。また後期の作品でも、『彼岸過迄』に4例、『行人』に3例、『ころ』に8例、『明暗』に1例の使用がある。前期と後期の間にあたる明治四十四年八月に和歌山で行った講演のタイトルは「現代日本の開化」であり、漱石にとって「現代」は重要な語であったようである。

本稿は、漱石の時代における「現代」に関する語群をめぐって、漱石並びにその当時の人々の時代認識を明らかにしようとするものである。

一 漱石にとっての「現代」と「当世」

漱石の作品を読んでいくと、「現代」と同じような意味の語として、三宅が指摘している「当世」の他に、「今代」や「現今」という語に出会う。例えば『吾輩は猫である』(明治三十八、三十九年)の十一章には近い箇所に「当世」「現代」「今代」の三語が使用されている。また少し離れて「現今」という語も用いられている。

僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になって居る。(530頁)

・ 苦沙弥君、君にしてそんな大議論を舌頭に弄する以上は、かく申す迷亭も憚りながら御あとで現代の文明に対する不平を堂々と云ふよ (530頁)

・ 悠々とか従容とか云ふ字は劃があつて意味のない言葉になつてしまふ。此点に於て今代の人は探偵的である。泥棒的である。(531頁)

・ 現今英国の小説家中で尤も個性のいちぎるしく作品があらはれた、メレヂスを見給へ、ジェームスを見給へ。(550頁)

「当世」は、『吾輩は猫である』や『三四郎』において「封建時代」と対の語として使用されており、新式であることを示している。

・ 鈴木君は利口者である。入らざる抵抗は避けらるゝ丈避けるのが当世で、無要の口論は封建時代の遺物と心得て居る。(四)

・ いか様古い建物と思はれて、柱に寂がある。其代り唐紙の立附が悪い。天井は真黒だ。洋燈許が当世に光つてゐる。野々宮君の様な新式な学者が、物数奇にこんな家を借りて、封建時代の孟宗藪を見て暮らすのと同格である。(三四郎)三

「当世」は、漱石の作品では『吾輩は猫である』に6例、『虞美人草』に8例、『三四郎』に1例、『それから』に1例、『門』に1例、『彼岸過迄』に1例、『ころ』に1例、『明暗』に4例用いられている。『それから』が「現代的」であるとすれば、『虞美人草』(明治四

十年)は「当世的」なのである。

博覧会は当世である。イルミネーションは尤も当世である。驚ろかんとして茲にあつまる者は当世的の男と女である。只あつと云つて、当世的に生存の自覚を強くする為めである。御互に御互の顔を見て、御互の世は当世だと默契して、自己の勢力を多数と認識したる後家に帰つて安眠する為めである。小野さんは此多数の当世のうちで、尤も当世なものである。得意なものは無理もない。得意な小野さんは同時に失意である。自分一人でこそ誰が眼にも当世に見える。申し分のある筈がない。然し時代後れの御荷物と丁寧二人迄脊負つて、幅の利かぬ過去と同一体だと当世から見られるのは、只見られるのではない。見咎められるも同然である。芝居に行つて、自分の着てゐる羽織の紋の大きさが、時代か時代後れか、それ許が気になつて、見物には一向身が入らぬものさへある。小野さんは肩身が狭い。(十一)

『眞美人草』における「当世」や「当世的」は、最初に挙げた『それから』の例や、次のような例から判断すると、「現代」や「現代的」と同義とすることができよう。

代助は此嫂を好いてゐる。此嫂は、天保調と明治の現代調を、容赦なく継ぎ合せた様な一種の人物である。わざ／＼仏蘭西にゐる義妹に注文して、六づかしい名のつく、頗る高価な織物を取寄せて、それを四五人で裁つて、帯に仕立て、見たり何かする(三) 漱石の作品を見ていくと、「当世」は次第に「現代」にとつて変わられていく様子が窺われる。『こゝろ』では「当世流」、「明暗」では4例のうち「当世向」が2例、「当世風」が1例のように接尾語を伴つた語として使用されている。接尾語を伴つた形態としては、「現代」はせいぜい「現代的」だけである。『それから』に見られる「現代調」は「天保調」に合わせた特殊なものであり、「現代」はまだその当時においては新しい語であるために様々な派生語を生み出せるほどには

「現代」の定着と「近代」

至っていないからである。

二 漱石の「今代」について

「今代」は、岩波書店の『漱石全集』の総索引(第二十八卷)では「近代/今代」として「近代」と一緒に掲げられており、「きんだい」と読むことが期待されている。『日本国語大辞典 第二版』でも、「きんだい(近代)」の補注において後で掲げる『幻影の盾』の「今代」の用例を挙げている。

注意しておかなければならないのは、漱石は小説には「近代」を用いていないようである。そのこともあって、『漱石全集』や『日本国語大辞典』は「今代」を「近代」の異表記と考えているのかもしれない。漱石自身が確かに書いたと思われる「近代」の用例は、近代劇協会や、「近代」という雑誌名や『近代文学と古文学』(厨川白村)や『近代思想の解剖』(樋口龍峽)といった献呈された本のタイトルなど書簡に見られる固有名詞の他には、次のようなものがある。そこに見られる「近代」は西洋のものに対してであり、日本のことについては用いていない。

- ・既に沙翁のかいたものでも分ければ幾通りにも分けられる恋が書いてありますが、近代に至ると其区別が益々細になりはせぬかと思はれます。(『創作家の態度』明治四十一年)
- ・余は近来若い人々と接触して、近代の作物又は現今の日本で出版になる創作に就いて批判的の意見を交換する事が多い。

(鑑賞と統一と独立) 明治四十三年)

また漱石の講義を受講生である中川芳太郎が浄書して漱石が手を加えて刊行された『文学論』(明治四十年)においても、「近代」が西洋のことについて次のように使用されている。

- ・こゝに述べんとする例の如きは誠に西洋文学中無類のものなるべ

「現代」の定着と「近代」

く、近代の婦人が決して堪へ能はざる苦しさを堪へ果たせるを描きしものなり。
(第一編 第二章)

・近時出版の Literary Guillotine と名くる書物の中に近代の作家を召喚して、法廷の吟味に擬したる滑稽的漫評あり。
(第四編 第三章)

一方、「今代」は先に挙げた『吾輩は猫である』の例以外に『文学論』の用例を除いて次の四例が使用されている。

・遠き世の物語である。バロンと名乗るもの、城を構へ濠を環らし、人を屠り天に驕れる昔に帰れ。今代の話ではない。
(『幻影の盾』)

・開化の高潮度に達せる今代に於て二個の個性が普通以上に親密の程度を以て連結され得べき理由のあるべき筈がない。
(『吾輩は猫である』十一)

・余裕は画に於て、詩に於て、もしくは文章に於て、必須の条件である。今代芸術の一大弊竇は、所謂文明の潮流が、徒に芸術の土を駆つて、拘々として随所に齷齪たらしむるにある。

表1 岩波(大正)は大正十三年版、岩波(昭和)は昭和四十年版 集英は漱石文学集 岩波(平成)は平成五年版の全集のことである。

	原稿	初出	初版	岩波(大正)	岩波(昭和)	集英	岩波(平成)
幻影の盾	(不明)			きんだい	きんだい	きんだい	(きんだい)
吾輩は猫である①				きんだい	きんだい	きんだい	(きんだい)
②				きんだい	きんだい	きんだい	(きんだい)
草枕		きんだい		きんだい	きんだい	きんだい	(きんだい)
それから	こんだい	こんだい	こんだい	きんだい	きんだい	こんだい	こんだい

・と云つて、進まぬものを貰ひませうと云ふのは今代人として馬鹿気てゐる。代助は此デレンマの間に低回した。
(『それから』十三)

『文学論』においては文学史を扱っている関係で「今代」の使用が多い(10例)。ここでは?例だけ示しておく。

・一方に於ては上代が経験し得ざりし事項(人事の)を今代に至つて知覚すること多し。
(第二編 第一章)

・又は古代と今代と、もしくは今代と予想せられたる後代との差違をも含む。
(第五編)

「今代」の読みに関していえば、『それから』において「今代人」に対して漱石は「こんだいじん」と振り仮名を施している。そのため、全集の総索引では「今代人」は「近代/今代」の項にも、「今代人(こんだいじん)」の項にも掲出されている。このような「こんだい」という漱石の振り仮名があるにも関わらず、「今代」を「きんだい」と読んでよいのだろうか。また「近代」の異表記と見てよいのだろうか。

表1には、それぞれの作品の初出や初版、大正十三年版と昭和四十年版そして引用に用いている平成版の岩波の『漱石全集』と、集英社の『漱石文学全集』に施されている振り仮名を示した。なお『文学論』には振り仮名が施されていないので表には含めなかった。

『それから』の例を除くと、初出や初版に振り仮名が施されているのは『草枕』の初出だけである。そこには確かに「きんだい」とある。初出の段階で付されていることから、それを信頼して全集類では「きんだい」と補読しているのであろう。

『それから』以外の作品では漱石の原稿には振り仮名が施されていないかと思われる。『幻影の盾』を除いて、『吾輩は猫である』の十一章並びに『草枕』は原稿が残っている。その原稿に基づいて本文確定を行っている平成版の『漱石全集』には括弧付きで振り仮名、すなわち編集部によるルビが施されていることから、原稿に振り仮名がなかったことがわかる。

それでは『それから』の原稿に施されている漱石の振り仮名は誤りなのかという問題が生じてくる。『それから』の初出や初版では「こんだい」としているのに対し、岩波の全集では平成版以外は、『それから』の例も「きんだい」と読んでいることから、誤りという立場なのであろう。つまり、漱石の弟子達は「今代」の読みを「きんだい」と考えていたのである。

確かに、北村透谷の「徳川氏時代の平民的思想」（明治二十五年）では「今代」を『草枕』のように「きんだい」と読んでいる。

今代の難波文学は僅に吾妻の花に反応する仇なる面影に過ぎざれども、徳川氏の初代に於て大に気焔を吐きたるものは彼にてありし。

〔女学雑誌』三三三号甲巻）

しかし泉鏡花の『三尺角』（明治三十二年）には「こんだい」と振り仮名がある。

柳屋は土地で老舗だけれども、手広く商をするのではなく、八九

「現代」の定着と「近代」

十軒もあろう百軒足らずの此の部落だけを花主にして、こんだい今代は喜蔵といふ少い亭主が、
〔新小説』第四年一卷）

ただし、この場合は時代というよりも今の当主という意味合いである。明治時代の日本史の教科書で、「近代」という語が広く使用されるまでは明治時代を「今代」あるいは「今代史」として章立てが行われている。振り仮名が施されているものは少ないが、例えば『帝國絵入歴史』（明治二十六年）には「第十一章 今代史」とある。時代としては「きんだい」と、また統治の意味では「こんだい」と読み分けていたのかもしれない。

「今代」の読みを明治時代の漢語辞書で確認していくと、
〔必携熟字集』明治十二年）
今代 イマノヨ

と「こんたい」とある。漢語辞書の中には親字である「今」をキンの項に含めてはいるが、「今代」についてはその説明中で「コンダイトヨム。今世。」としている。『新編漢語辞林』（明治三十七年）のようなものもある。「今」の漢字音は、漢音はキン、呉音がコンである。明治時代においては漢音重視であることから、漢音によって配列されることも多くあり、そのような立場から「今」をキンの項に含めているのである。しかし実際の音としては「コンダイ」であることから、このような注記を施したのであろう。

『日本国語大辞典 第二版』などによると、「今代」は漢籍に見られ、中世や近世の使用例もあるが、その使用は明治時代になってから多くなったようである。ヘボンの『和英語林集成』の三版（明治十九年）にはまだ見出し語として登載されていないが、『言海』二巻（明治二十二年）には、
こんだい（名） 今代 イマノ代。（位ニ居リ、又ハ、家ヲ継ギ居ル間ニイフ、代ノ条ヲ見ヨ）

とある。ただしこの場合は統制的な意味である。後続する『日本大辞書』（明治二十六年）や『ことばの泉』（明治三十二年）には登載され

「現代」の定着と「近代」

ていないが、『辞林』（明治四十年）では時代の意味で記されている。

こんだい（近代）いまのよ。

辞書によると、「近代」の読みは「こんだい」でしか登載されていない。しかし、『草枕』の初出や北村透谷の例からすると、「こんだい」の読みも行われていたのであろう。「きんだい」という音もあり、また後述するように意味的にも似ていることから、全集の各版や岩波の総索引は「近代」は「近代」の異表記として処理したのである。

なお『草枕』には「近代」の用例の近くに、「今世」が「古代」と対の関係で使用されている。そこには「きんせい」と振り仮名が施されている。「今世」も後で見えるように辞書の見出しとして採用されている規範的な音は「こんせい」であるが、『草枕』の編集者は「近代」「今世」を「きんだい」「きんせい」と認識していたようである。

古代希臘の彫刻はいざ知らず、今世仏国の画家が命と頼む裸体画を見る度に（七）

ちなみに「近」の漢字音はキンが漢音、ゴンが呉音、コンが慣用音である。つまり、「近」も「今」もキンとコンという同じ音を持っている。

『門』の最初に出てくる宗助の物忘れは、正しくこの「今」と「近」に関するものである。

「お米、近來の近のどう書いたつけね」と尋ねた。細君は別に呆れた様子もなく、若い女に特有なけたまわし笑いも立てず、

「近江のおほの字ぢやなくて」と答へた。

「其近江のおほの字が分らないんだ」

細君は立て切った障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指を出して、其先で近の字を縁側へ書いて見せて、

（中略）

「何うも字と云ふものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「何故」

「何故つて、幾何容易い字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ちつと眺めてみると、何だか違つた様な気がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る。――御前そんな事を経験した事はないかい」

（一）
なお、漱石は「近代」を『それから』までしか使用していない。これは次に扱う「現今」も小説においては同じである。漱石にとって、これらの語は「現代」を使用することによって次第にその役目を果たすようである。

三 「現今」について

漱石は、「現今」を小説においては『倫敦塔』『吾輩は猫である』（5例）『草枕』（2例）『三四郎』『それから』（2例）において使用している。

「現今」は、『日本国語大辞典 第二版』によると、もとは「今、目の前。この瞬間」という意味であり、中世や近世の用例が見られる。ここで問題としている「今の時代」という意味は、江戸後期頃から見え始めるが、使用が多くなつたのは「近代」と同じく明治時代になつてからのようである。

ヘボンの『和英語林集成』では三版（明治十九年）から登載されるようになる。

Genkon ゲンコン 現今 (ima) adv. At present; present
time: now.

『言海』（明治二十二年）や『日本大辞書』（明治二十六年）にも登載されているように、「現今」は明治時代では重要な語として使用されるようになる。

げんこん（名）現今 イマ。マノアタリ。現在。当時。〔言海〕

げんこん 名。現今 漢語。現在。|| マノアタリ。

〔日本大辞書〕

漱石は、「現代日本の開化」(明治四十四年)の中でこの演題について説明しているが、そこで「現代」と「現今」とが同義であることを述べている。

「現代」と云ふ字があつて「開化」と云ふ字があつて、其の間へ「の」の字が入つて居ると思へば夫丈の話です、何の雑作もなく唯現今の日本の開化と云ふ、斯う云ふ単簡なものです。

このように新しい語である「現代」を説明するために古い語である「現今」を用いているように、漱石にとつては「現代」を使用することによって、「現今」の必要性を感じなくなったのであらう。

四 「近代」の二義性

漱石は「近代」を小説で使用していないようであるが、「近代」は漢籍にあることばである。日本では『続日本紀』に既に使用されており、中古、中世、近世の文献や辞書に見られるように、日本語としては馴染みのある語である。「近代」は「上古」と対立しているような概念であり、現在に近い漠然とした時代を指しているようである。

・上古事者然乎、近代事者一条家管領也。

〔蔭涼軒日録〕文明十八年六月十九日 一四八六年)

明治時代の辞書類においては、ヘボンの『和英語林集成』では「近代」は「現今」と同じく第三版(明治十九年)になって登載されるようになる。

KINDAI 近代 n. Recent or modern times.

このことばは、後に歴史学と関わり、modern timesが意味説明として用いられている。しかし modern times(訳語として)は、

MODERN. Imo no; toji no, kimrai no — times, konsei;

「現代」の定着と「近代」

chikagoro, kon-ji. Ancient and —, ko-kon.

とあり、「近代」ではなく「こんせい(今世)」「ちかごろ(近頃)」「こんじ(今時)」が対応している。しかし、『和英語林集成』では「今世」「今時」は見出し語として掲出されていない。また modern timesと「近代」との結びつきは強くなかったようである。

国語辞書においては、「近代」はそれぞれ次のように説明されている。なお、「近代」と関係があると思われる「近世」の意味を括弧の中に示した。

・ちかきよ、近世 Modern ages, recent generation.
(ちかきよ、近代 Modern ages, recent times)

・過ギテ程経ヌ代。チカゴロ。近世。
(近代ニ同ジ) 〔漢英対照いろは辞典〕明治二十一年)

・漢語。チカゴロニ近世。
(漢語。近代) 〔日本大辞書〕明治二十五年)

これらの記述からわかるように、「近代」は「近世」と同義であり、「過ギテ程経ヌ代」(『言海』)である。『言海』が「代」に対し統治の意味を重視していたことからすれば、「近代」は「今代」(明治時代)を含まないことになる。つまり、「近代」は明治二十年代においては明治維新以降を含まないことになる。『言海』や『日本大辞書』における時代把握は、熟字の後ろの字の要素で分類すると、次のようになる。

代……上代 近代 今代

古……上古 中古

世……上世 中世 近世 今世

『ことばの泉』(明治三十二年)の頃になると、歴史学における時代区分の影響で、それぞれの語の示す時期が限定されるようになる。

西洋の歴史学では古代(ancient ages)・中世(medieval ages)・近

「現代」の定着と「近代」

世 (近代) (modern ages) の三分法が行われ、modern ages もしくは modern times がこの「近世 (近代)」にあたる。これを日本の歴史にも援用し、江戸初期以降の歴史をまとめた内田銀蔵による『日本近世史』(明治三十六年) がある。内田は明治維新以降を「最近世」としている。

この時代区分とは異なり、一般の人々が見る辞書では、例えば『辞林』(明治四十年) では、次のような五分法が採用されている。

- 上古 (神武天皇より大化の改新まで)
- 中古 (大化の改新より源頼朝の総追捕使となるまで)
- 近古 (後鳥羽天皇の文治二年より後陽成天皇の慶長八年まで)
- 近世 (後陽成天皇の慶長八年から明治維新まで)
- 近代 (明治維新以後)

この時代区分が採用された結果、「近代」と「近世」との間には、「近代」イコール「近世」という同義の場合と、「近世」の後が「近代」という前後関係の場合との二義性が生じることになる。

- ・①今のよ。きんせい ②歴史上にては、我が国のは、明治以後。
- ①近き世。きんだい。②歴史上にては、後陽成天皇の慶長八年より、今上天皇の即位ありし時まで)

『ことばの泉』明治三十二年

- ・①このころ。ちかごろ。②歴史上の区別にし、我国にては明治維新以後、西洋にては十九世紀末以後。

①このころの時世。きんじ。こんせい。②歴史上の区別にして、近古以後の称。我国にては後陽成天皇の慶長八年から明治維新までを指し、西洋にては紀元千百十五年神聖同盟の締結以後より十九世紀の末頃迄をいふ。)

『辞林』明治四十年

また、時代区分がなされるまでは「近代」と「当世」(当代) あるいは「今世」とは時間的に異なっていた。

・当世 いまのよ、今世 This age, present age.

今世 (こんせい) いまのよ 現時 Present times.

当代 いまのみよ、当世 This reign: Present dynasty.

(漢英対照いろは辞典)

・当世 イマノヨノナカ。今世

今世 (こんせい) イマノヨノナカ

当代 (一) イマノヨ。当世。今世 (二) 当今ノ世継。

『言海』明治二十一〜三二年

・当世 字音。(一) 今ノ世ノ中。(二) 今ノ世ノ中ノ普通。

今世 見出しなし

当代 字音。(一) 当世。(二) 現時の主人 (『日本大辞書』)

和英辞典であるブリックリーの『和英大辞典』(明治二十九年) においても、次のように対応する英語が異なっている。

Kindai きんだい、近代 n. Modern age; present. Syn.

CHIKAKIYO, KINSEI.

Kinsei きんせい、近世 n. Modern age.

Today たうだう、当代 n. The present dynasty; the

present age or time.

Tosei たうせい、当世、今世 n. The present age.

Konsei こんせい、今世 n. The present age. Syn. IMA NO

YO.

Kondai こんだう、今代 n. The present dynasty; this age.

時代区分が一般的になるまでは、「近世」と「当世」「今世」と「近代」と「今代」との間に明らかな時間的な差があった。

近世 当世・今世

近代 当代・今代

しかし歴史的な区分がなされるようになってからは、「当世」の意味記述に「近代」とあったり(『ことば泉』)、また、「当代」や「今世」の意味記述に「近世」が見られたりして(『辞林』)、それぞれの語の

時間的な領域が曖昧になってくる。

・当代 今の代。近代。

当代 ①とうせいにおなじ。②今の世つき。当主人の代。

今世 (こんせい) 今の世。現在の世。〔ことばの泉〕

・当代 ①今の世の中。②たうせいふう。

当代 ①当代。いまのよ。きんせい。②現時の家主。

今世 (こんせい) 今の世。きんせい。

当代 いまのよ。

〔辞林〕

ヨーロッパの歴史学の影響を受けるまでは「近代」は「今代」(明治時代)を含んでいなかった。先に日本史の教科書の「今代」の例を見たが、多くの教科書では「近世」の後は「今代」になっている。

「近代」という時代がヨーロッパの歴史学によって設定され、その「近代」が明治維新以降を指すようになり、「今代」とイコール関係が成立することになった。しかし、実際には辞書の意味記述に見られるように、「近代」には

1 これまで考えていた「今代」より少し以前の時代

2 歴史学用語としての明治維新以降の時代

の二つの意味が混在しているのである。

日本史の教科書では「今代」を「きんだい」と読んでいたことから、「今代」から「近代」への以降は容易であったであろう。しかし、「近代」が定着すると、逆に「今代」を「きんだい」と読めなくなっていく。

なお、漱石は「近代」を西洋のものにしか使用しないが、時代区分としては例えば「近世英文学」とか「近世科学」のように「近代」ではなく「近世」を用いている。ただし、「近世」と「現代」とは区別していたようである。「近世(近代)」と「現代」との相違としては、近世科学の泰斗として Clerk Maxwell (一八三二―一八七九) を挙げ、現代小説の泰斗として Meredith (一八二九―一九〇九) を挙げてい

「現代」の定着と「近代」

ることからすると、現存して活躍しているかどうかを重視しているのかもしれない。

五 「現代」の定着

「現代」は明治三十年代になると広く使用されるようになるが、古いところでは内田魯庵が明治二十四年十一月二十三日から二十五年一月三日にかけて『国民之友』に四回にわたって連載した「現代文学」という文章がある。ただし、そこで使用されている「現代」は一回だけであり、其三(十二月三日)の最初に用いられている。

是を僅かに二十年來の既往に徴する現代文学の頗る多望なるを肯んずるに足らむ。

この文章では「現代」は明治維新以降を指している。他の箇所では、「今の文学」「今日の三文学」「今日の文学」といった表現になっている。また少し後の『国民之友』明治二十六年七月三日号では「今日の小説及び小説家」というタイトルで発表しているように、「現代」という語の使用はまだ早すぎたようである。ただし、国立国語研究所による『太陽コーパス』によれば、雑誌『太陽』の創刊された明治二十八年には「近代」とともに「現代」の使用も見られる。なお「近代的」が明治三十四年に出現するのに対し「現代的」は明治四十二年とされており、「現代的」の使用は「近代的」より少し遅れている。

「現代」という語は、過去・現在・未来あるいは前世・現世・来世の「現在」あるいは「現世」をもとに、「近代」の影響によって時代を表す「代」を結合させた語であり、明治三十年代後半頃から使用が多くなっていく。「現代」の辞書への登場は明治四十年の『辞林』が早いところであろう。「近代」とはその意味の記述は異なっており、また「近代」との同義性については触れられていない。

げんだい 「現代」(名) いまのよ。たうじ。げんこん。方今。

「現代」の定着と「近代」

きんだい 「近代」(名) ①このごろ。ちかごろ。②歴史上の區別にし、我國にては明治維新以後、西洋にては十九世紀末以後。

ただし「現代」とは三宅雪嶺が、「現代的、将来的、永久的」において、

現代とは、過去及び将来に対し、現在の人の存在しつゝある間を指す者にして、現代史といへば、著者が世間を知りてより筆を執るまでをいふが、筆を執る時は、その以前は過去に入り、筆を擱く時は、其の以前は過去に入り、筆を擱く時は、筆を執りし間も過去に入る。厳密なる意義の現代は僅かに一瞬間の事にして、今日現代といふ所は明日現代ならず。

と述べているように、現時点ということにならう。つまり、「現代」とは我々が考えているような時代区分の用語ではないのである。「近代」を明治維新以降とすれば、「近代」という時間軸の中に「現代」が存在するのである。「近代」と「現代」とは現在及び現在に近い部分において重なっている。「近代」はある場合には「現代」と同義になり、ある場合は「現代」よりも広い時間幅で使用されることになる。例えば英語においても、modern の中に contemporary や present-day という時代区分が存在している。

「近代」や「現代」との同義性は、例えば「近代人」と「現代人」との間に見られる。「現代式(的)」が三宅のいうようにマイナス的に用いられていたように、「近代人」もマイナス評価の語であった。『文章世界』の五巻九号(明治四十三年七月)には「近代人とは何ぞや」というテーマが組まれている。上司小剣は「藪を破つて出て来た蚕の蛾」という題で「近代人」の特徴を述べている。

近代人の特徴は一言にして云へば、自己的だ。一体に余裕のある、ゆとりの有る人はなくなつて、死ぬにも死なねば、活きるに活きられずと云つたやうな切迫した生活に自然となつて来た。

経世家の所謂情けなき傾向であらう。

また同誌で金子筑水は「現実的と動揺不安の心持」という題で「近代人」の特徴を挙げ、次のように定義している。

極く広い意味で近代人といふのは、前代の理想的又はローマチックな傾向を追つた人々に対したものだと思ふ。総べて前代を支配した理想、道徳、宗教、習慣等の約束を離れて、全く自由な空気を呼吸しやうとする若い人々であらう。

この定義によれば、前代に対することからいへば「今代」ということとなるし、その前代を江戸時代と考えれば明治以降の「近代」となる。明治四十三年の段階で「若い人々」ということになれば、「現代」の人々にならう。新しい考えや行動を行う若者を、執筆者達とは異なる新人類と見ているのである。漱石は『三四郎』(明治四十二年)において「現代人」を次のように説明している。

——中教師杯の生活状態を聞いて見ると、みな気の毒なもの許の様だが、真に気の毒と思ふのは当人丈である。なぜといふと、現代人は事実を好むが、事実に伴ふ情操は切り捨てる習慣である。切り棄てなければならぬ程、世間が切迫してゐるのだから仕方がない。其証拠には新聞を見ると分る。新聞の社会記事は十の九迄悲劇である。けれども我々は此悲劇を悲劇として味はう余裕はない。たゞ事実の報道として読む丈である。(十)

漱石のこの説明からは、上司の述べている「近代人」との違いは認められない。

明治維新以降の時間が長くなり、また「現代」の使用が次第に多くなるにつれ、「近代」と「現代」との間に意味の違いが生じてくるようになる。「近代」を熟語とする語には、封建社会に対する新しい思想(近代思想)に基づいたという意味が強調されるようになり、プラスの意味合いで使用されるようになる。

近代劇 近代思想を盛った戯曲・演劇。特に十九世紀後期のイブ

セン、ストリントベルヒ等を先導とする新戯曲を指す。

近代人 ①近代の人。②近代的な思想をもつてゐる人。

現代劇 現代の風俗を描写する演劇。現代社会

現代人 現代に生活する人。②現存人類。*現生人類

〔大辞典〕昭和十年

このように「近代」と「現代」との間には意味の違いが見られるが、その一方で「近代」と「現代」とが長く同義的に扱われたのは外来語モダンの影響が大きかったと思われる。

六 外来語「モダン」の登場

漱石は「モダン」を小説においては使用していない。ただし談話の中に見られるが、それも雑誌の記者の使用した語を繰り返しているにすぎず、漱石が進んで用いた語とはいえないであろう。

『虞美人草』の藤尾の性格は、我儘に育つた私の強い所から来たのか、自意識の強いモダンな所から来たのかと云ふのですか、それは両方に跨つて居る。単に自意識の強いモダンな所を見せようと云ふ、それを目的に書いたならあゝは書かなかつたであらう。併し一面に於てはそれも含んで居る。(予の希望は独立せる作品也) 『新潮』十巻二号 明治四十二年二月

「現代的」が流行したほぼ同時期に、外来語「モダン」の使用も多くなつてくる。

渠の書生時代には外国の学問は異端の教へといふやうに青年の群から斥けられて居て、外国語を少しも学ばなかつたので、此の頃新聞でよく使ふモダン(modern)といふ字は何ういふ意味だなどと鉄之助に聞いた。(田山花袋『生』九 明治四十一年)

モダンの原語であるmodernの訳語にも二義性が見られる。例えば、へボンの『和英語林集成』が「ima no(今の)」「toji no(当時の)」「現代」の定着と「近代」

「kinrai no(近來の)」としているように現在及び現在に近い時点を表している。その一方で、時代区分としてmodern agesが「近代」あるいは「近世」に対応することから、洋書のタイトルにあるmodernは「近代」と訳されることが多かった。英語のmodernの表す幅から、日本語としては「近代」や今現在を表す「現代」が対応することになる。そして「近代的」や「現代的」の流行により、原語であるmodernが外来語「モダン(モダン)」として注目されるようになったのである。

時代研究会による『現代新語辞典』(大正五年)には「モダン」近代の、現代の、近代人、現代人」とあり、「近代」と「現代」とを並列の関係として扱っている。このような新語辞典や後に出現するモダン語辞典類は、同じような意味記述を踏襲しており、その結果、「近代」と「現代」との同義性が長く保たれることになったのである。

まとめ

明治時代においては、「近代」や「近代人」が現代で言うところの「現代」や「現代人」の意味でも使用されている。それは歴史学において時代区分として明治維新以降を「近代」としたことによるものである。そのような状況において、「現代」が出現したのは明治維新以降を示していた「今代」が「きんだい」と読まれることもあり、「近代」と区別する目的があったと考えられる。それは「近代」が二義性という問題を抱えていたからである。歴史学による明治維新以降の時代と、それまで使用していた明治よりも少し前の時代を指すという二つの意味が混在していたのである。そこで、あくまでも現在という時点を明確に示すために「現代」は必要だったのである。

漱石の時代認識に関わる用語を眺めていくと、「現今」「今代」「当世」の使用から「現代」への使用の動きが認められる。「現今」「今代」

「現代」の定着と「近代」

は『それから』までの使用であり、「当世」も接尾語を伴った形で使用へと変わってきた。つまり、「現代」は漱石にとって「現今」「近代」「当世」といった同義的な語を包含する便利な語であった。

漱石はその「現代」は使用するが「近代」は使用しなかった。それは次のような理由によるものと考えられる。

一 「近代」を使用する者にとって、「近代」は「今代」よりも前の時代であり、「今の代」すなわち明治維新以降を含んでいない。そのことにより、「今代」に代わって使用されるようになった「現代」を用いた。

二 漱石は英文学者であったので、西洋史の三区に分身についていた。そのため、西洋史における「近代(modern ages)」と日本史における「近代」との間に時代的な相違があり、「近代」は西洋のものに限定して使用した。

漱石の時代認識としては、日本においては「封建社会」対「当世」「現代」の関係が認められ、また「現代」は「過去」と「未来」との三世の関係になっている。そして「今代」は時代区分や時代的な対立よりもあくまでも現在に重点が置かれている。一方、西洋においては「近世」「イコール」「近代」の関係であり、「近世」は時代区分として用いている。そして「近世(近代)」と「現代」とを現在生存して活躍しているかどうかで区別していたようである。

注

漱石の作品の引用は、平成五年から十一年にかけて刊行された岩波書店の『漱石全集』による。なお振り仮名は必要な箇所だけにとどめた。また他の作品の振り仮名もこれに倣う。

近代の作品の読みに関しては、国会図書館のマイクロフィルムや近代デジタルライブラリーを利用した。

1 用例数は、『作家用語索引 夏目漱石』を参考にした。なお、『道

草』については『CD-ROM版新潮文庫 明治の文豪』を利用した。

2 『漱石全集』のページを示した。

3 『文学論』(明治四十年)にも次のような記述がある。

此点に於ては、現代の青年は既に封建時代の青年と著しく其見解を異にするやも知るべからず。(第一編 第二章)

4 それぞれの学問分野の進展状況や、進展的な区切りを考える必要があるかもしれない。

5 太陽コーパスは、明治二十八年、三十四年、四十二年、大正六年、十四年のデータからなっている。

(宮城学院女子大学教授)